

?と!が生まれる 自然環境

「聴覚をフルに使う」など、ねらいを絞って園外散歩に行くことで、子どもたちの感性がいきいきとしてきます。その実践例をご紹介します。

監修＝大澤 力(東京家政大学教授)

自然を取り込む園庭作り vol.8

特定の五感を意識して

執筆＝内野彰裕(東京都・東京ゆりかご幼稚園園長)

園庭でのあそびのなかでも、子どもたちの五感は養われていますが、園外保育で自然の豊かな場所へ行くと、子どもたちはよりいっそう五感を総動員して、あそぶように感じています。保育者が計画立案する際、ねらいに「五感を使って……」のような定型的な表現を使いがちです。そこを、「今回はこの感覚を使ってほしい。こうすると使うのではないかと、ねらいを定めて計画を立てると、活動の目的がより明確になってくるはずです。

確かに子どもは、それぞれの感覚を複合的に作用させながらあそんでいます。そのなかでも五感の特定の部分を意識的に使ってみることで、子どもも保育者も新たな発見が得られるのではないのでしょうか。

例えば……

触覚

- 堅い木の実や軟らかい生き物など、感触の違いを実感する。
- 樹皮に触り、種類によって触感が違うことを知ったり、倒木の樹皮をむいてみたり、地面に寝転がって、大地の感触を味わったりする。

聴覚

- 森の中で鳥の声、木々のこすれ合う音、木の中を樹液が流れる音などを聞く。

視覚

- 絵の具で緑のグラデーションをかいて森へ持っていく、近い色の葉っぱを探す。

味覚・嗅覚

- 花や木の香りをかいでみたり、果樹をもちで食べたりする。



落ちていたメタセコイアの実を触った後、今度は近くの池でオタマジャクシをすくってあそぶ。堅い実と軟らかいオタマジャクシ、その感触の違いを感じ、オタマジャクシには、そっとふれる様子が見られる。



「気持ちいい!」。全身で大地のぬくもりを感じる。

聞こえた音と方角を好きな記号で表現するサウンドマップ。マップにすることで、普段気に留めないような音にも敏感になる。



「木も生きているんだね!」。聴診器を使って、木の音を聞く。



「葉っぱの緑って数えきれないほどたくさんあるんだ!」。森にグラデーションカードを持っていき、さまざまな色を探す。葉っぱの色と照らし合わせ、近い色を探す、本当にぴったりな色はない。

※このページでは、「いつでも自然とふれあえる園庭」を目指して、保護者と子どもと保育者で園庭改造に乗り出した東京ゆりかご幼稚園の実践を、1年間をご紹介します。来月は「小川が作り出した自然環境」です。

自然環境を感じる

葉っぱのプールで 虫探し&腐葉土作り

掃いても掃いても降り積もる落ち葉。発想の転換で、その落ち葉を上手に利用することができます。ちょっとしたスペースがあれば、どの園でも可能な取り組みです。

執筆=東京ゆりかご幼稚園(東京都)

雑木林からヒントを得て

当園の園庭にはたくさんの落樹木があり、秋になると、その葉を一齐に落とします。以前は、毎朝保育者が掃いて処分していました。しかし、相当な量があるため、作業もたいへん。そこで、園外保育で出かける雑木林からヒントを得て、落ち葉をそのまま地面に堆積させていくようにしました。子どもたちは、踏んでその音や感触を楽しんだり、集めてきてまごをしたりなど、思いのほか喜びました。そこで、この落ち葉を使って継続的に子どもたちがあそべるよう、コンクリートパネル4枚で囲いを作り、「葉っぱのプール」にしたのです。

「葉っぱのプール」は、園庭のほぼ中央に作りました。「こんなよい場所にもったいない!」という保育者もいましたが、これによって園庭に「入り組んだ地形」ができ、あそびの動線に変化が出てプラスになると考えました。実際、子どもたちはここを拠点や隠れ家にしてあそんでおり、鬼ごっこするときもオニをまくポイントとして使っています。また、落ち葉の掃き掃除が軽減したことは、保育者にとっても喜ばしいことでした。



1.5m四方ほどの空間が、子どもたちにとって驚きや発見の宝庫になる。



幼虫探しに夢中になる子どもたち。発見した幼虫の何匹かは観察ケースに入れ、保育室でも成長を見守れるように。

「先生、見つけて〜」。虫が苦手な子と一緒に、保育者も虫探し。



「葉っぱのプール」は虫の宝庫

「葉っぱのプール」には、保育者や子どもたちが落ち葉を入れ、子どもたちが中に入って自由にあそんでいましたが、設置から半年後、葉っぱを掘り返してみると、中からたくさんのカナブンやカブトムシの幼虫が見つかりました。

それからというもの、子どもたちは宝探しのよう毎日「葉っぱのプール」を掘り返し、幼虫を並べて数えたり、観察ケースに入れて観察したり。カナブンの幼虫は、腐葉土で土の繭を作って、その中でサナギになります。夏には羽化して成虫となり、土繭から出てきて、次から次へと飛び立っていく様子が、毎年見られます。

こうして、「葉っぱのプール」は、子どもたちにとって、かけがえのない自然観察の場となっていました。

手間いらずの腐葉土作り

野菜や花を栽培するとき、土作りに欠かせない腐葉土。「葉っぱのプール」の下層には上質の腐葉土が形成され、栽培にはこれを使うようになりました。

難しく考えなくても、子どもたちが入ってあそんだり、虫を探して掘り返したりすることで、自然に落ち葉がかくはんされ、ちょうどよい腐葉土が出来上がります。子どもたちが掘り返しやすいように、いつでも「葉っぱのプール」のそばには熊手を用意しておきます。

落ち葉はあそび道具になり、焼き芋のときなどにたき火の材料になり、生き物を育てる土壌にもなります。また、自然にできた腐葉土を使って野菜を作るなど、落ち葉を通してのさまざまな活動やかかわりが、自然の循環のなかに人がいるということを感じさせてくれています。



「わたしにも見せて!」。初めて見る土繭に興味津々。



6月、「葉っぱのプール」で大量の土繭が見つかった。この中から、きれいな色をしたカナブンが出てくる。

身近な自然場を作るひと工夫

あそび場・水場・砂場など、〇〇場といった名称には、「そこで何かを行う場所」といった意味が込められています。「葉っぱのプール」は、いわば、手軽にできて身近な「自然場」と言えるでしょう。このようなものは園庭の端にあるのが通例ですが、ここで「園庭のほぼ真ん中」というのが重要です。そして、名称も「葉」と言わずに「葉っぱ」、「貯め場」ではなく「プール」。子どもたちにとって親しみのあるわかりやすい名称です。あそびの場として、労作の場として、好奇心を駆り立てる場として、さらには作物に栄養を与える腐葉土として活用する、まさに一石四鳥、五鳥……の葉っぱのプール。子どもたちの動きをよく見て感じて、ひと工夫。身近なところに、自然を実感できる場作りのヒントがたくさん転がっているという、ひとつの望ましい実例です。

(大澤 力)